

などいふ類是也、また鍾の字讀みてサカヅキといふ也、即今盜器にしてチヨクといふものは、也、鍾を呼びてチヨクといふは、福建及び朝鮮の方言なるを、近俗かの方言の如くに呼びし也、

〔南嶺遺稿〕四盃はさかつぎ也、然れども左様に讀ては風雅ならざる故、さかつぎといふ也、湯をつぐものをゆつぎと云類也、觴は角にて製たるもの也、其形くぼみたる物也、盞はひらき盃也、卮は小盃也、盃は唐にて蓋有盃也、

〔日本書紀七景行〕十八年八月、到的邑而進食、是日膳夫等遺盞、故時人號其忘盞處曰浮羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗號盞曰浮羽、

〔料理通四編〕普茶卓子略式心得

一席中、都て雅言を用ゆ、○中盃を爵といひ、又單提といひ、○下

盃初見

〔古事記上〕又其神○素戔嗚尊之嫡后須勢理毘賣命甚爲嫉妬、故其日子遲神和備氏、自出雲將上坐倭國而裝束立時、片御手者繫御馬之鞍、片御足踏入其御鐙而歌曰、○中爾其後取大御酒、坏立依指舉而

歌曰、○歌

盃製作

〔延喜式十七内匠〕銀器
盞一口受三合、料、銀大一斤、炭六斗、和炭一石二斗、油一合、五勺、長功一十人、火工二人、磨二人、夫三人、中功一十一人、工八人、夫三人、短功一十二人、工九人、夫三人、

朱漆器
盞一口、徑五寸、料、漆一合七勺、朱沙一分、質布二寸四分、純布各一寸、綿二分、掃墨一勺、油一勺、炭一升、長功一人、中功一人、小半、短功一人、大半、

〔貞丈雜記七酒盃〕一古は祝儀にも常にも、盃といふは皆かわらけ也、さかつぎといふ事は近代の事也、今も盃を朱ぬりにして、うすくひらくするは、かわらけをまなびたる物也、京の銀閣寺に、七賢の盃として七ッ入子の盃に、晉の七賢の名を蒔繪にえたる盃あり、是は東山殿の御盃也と申傳る